

す。

生まれ故郷、中国との万年平和を！

宮城県 佐々木 二郎

一 はじめに

去る平成六（一九九四）年の夏、機会を得て夢にまで見ていた私の生まれ故郷、満州への訪問団の一員として中国に行くことになった。出発するまでの間、永年の夢がかなえられることで胸を踊らせていたが、その反面心の中ではかなり不安な気持ちで渦巻いていたことも事実であった。

それは、満州で生を受けて以来十五年、特に敗戦前の約五年間を過ごした蓋平地区の周辺にあった鉱山の蛸部屋のことや、死体の埋まっていた万人坑などを思い出し、子供心にも頭にこびりついていた惨状と、戦後になって「真相はこうだ」などの暴露記事として興味本位にしかも針小棒大に

報じられていた同胞の蛮行のことなどを思い合わせる、現在の中国人に対してどのように接していけばよいのかという思いが巡り、ただ単純に懐かしさだけで諸手を挙げて訪問することにもいささかのためらいが、心の中にくすぶりだした。しかし、出発の日が迫ってくるに従って、やはり懐かしさの方が強くなり、現地に行つて然るべき人に会ったら、敗戦前に満州に生まれ、育つた一日本人としてひと言謝罪をしようと思ひ、意を決して訪問団に加わつて出発した。

現地で、終始世話をしてくれたRさんという通訳がいたが、この人に話をするのが一番良いと思つてその機会を狙っているうちに、つい口に出すことができずに、チャンスを逸してしまった。旅行の最終地である娘々ニヤンニヤン廟で、ここで話さないとあとがなれないと思ひながらも、とうとう口に出す勇気がなかった。

この『平和の礎』に、私のつたない引揚記録を書き始めたのも、あのときに口に出して言えな

かった私の気持ちを、ペンに代えて表そうと考えたからであった。

二 渡満のいきさつ

父、佐々木方策は、大正の中ごろに大学を卒業したが、当時の日本国内は不況のただ中で、働きたくとも適当な働き場所がなかった。それで当時、農業経営の最先端をいっていた温室栽培の権威者で、自らも温室経営をしていたK氏の下に、見習いとなって働いた。

「汗水垂らして働いていたが、「学士さんが荷車を引いている」と、父の働きぶりを感じて見ていてくれた人がいて、大正の初めに設立された「南満州製糖会社」を紹介してくれた。入社試験にも通ってその会社に入社し、「甜菜大根の栽培研究」の係を命ぜられた。父もこの研究には大変に興味を持っていたので、水を得た魚のごとく研究に没頭していたが、その努力が認められて、やはり同じく甜菜大根栽培研究のために会社から三年間の予定で米国に派遣されたが、いかなる理由

からか予定の三年が未だ一年半も残っているのに、突然に帰国を命ぜられて洩々戻った。

意気消沈していた父に世話する人があって、東京生まれの、とみ、という女性と結婚した。それが母である。二人は慌ただしい結婚式を挙げて、再び開原にあった南満製糖の農場に赴任した。その後、開原から鉄嶺へと移ったが、農場一筋に働いていた。

その当時は、中国東北部は軍閥割拠の不安定な状況が続いていたが、その中でも張作霖軍閥が他の勢力よりも抜きん出た力を持って、中国東北部を制していた。張政権と日本側とは、いろいろな面で衝突を繰り返していて、関東軍も頭を抱えていた。そんなこともあって、南満製糖も経営が思うようにいかなくなり、業績不振に陥り、会社の幹部は責任を取って総退陣ということになり、父も幹部の一人として詰め腹を切らされた。

だが、父は情熱を持って働いた満州の地を去ることができずに、満州に骨を埋める覚悟でいたの

で、かつて米国滞在中に見たリンゴ栽培、やはり関東州で見聞したリンゴ園の状況などを思い出し、満州でリンゴ園を経営することを決意した。

その適地として選定したのが、蓋平にあった満鉄の所有地であった。ここがリンゴ栽培に最適であると決心した父は、あちらこちらから資金を借り集め、約一万一千円で二十町歩余りの権利を譲り受けて、その地に定着した。これが昭和元（一九二六）年の十月だった。

その当時の日本政府は、かつての日露戦争の勝利により、関東州の租借と南満州鉄道（満鉄）の九十九年の使用权を有していて、その維持のため鉄路両側の土地使用の権利を持っていて、それが付属地と言われていた。

三 私の子の生い立ち

私は昭和五年に、リンゴの木に囲まれた蓋平の家で生まれた。私の上には開原で生まれた兄と、鉄嶺で生まれた姉がいた。そのころのことで、現在でも記憶に残っていることは、家は南に面した

細長い形をしていて、石造りだったことだけである。そのころの蓋平地区は、治安も概して良好で平穩な生活であった。一度だけ匪賊の襲撃があつて、石造りの家の窓下にへばり付いたことを思い出す。

昭和十一年には妹も生まれ、兄弟妹の四人となり、何一つ不自由のない日常生活であった。父の仕事のリンゴ栽培も順調で、軌道に乗っていた。昭和十二年ごろには今までの家の近くに新しい家を建て、一家はそこに移り住んだ。私たちは、近くの小学校、幼稚園に通っていたが、近くといっても三百メートルぐらゐは離れていたもので、心配性の母は随分と気を使っていて、通学以外は高学年生になるまでは外での遊びは許されなかった。もっぱら、父に従ってリンゴ園に行くのが随一の外遊びだった。

昭和十六年、五年生の冬に日米開戦となり、ここ蓋平でも日常生活が緊張してきた。それ以前から日支事変が始まっていたが、満州の地では遠い

所の出来事のような感がしていた。

昭和十五年ごろは、蓋平地区に住む日本人は未だ少なく千人に満たなかったが、それでも、日本人幼稚園とか日本人小学校があった。しかし別々の場所に所在していたわけではなく、同じ建物の中に一緒に存在していて、いわば併設という形であった。小学校では一つの教室を半分に仕切って、一方を一つの学年が使用していた。小学校での同級生は二十人ぐらいだった。

蓋平にも満鉄の駅があったが、鉄道建設をした当時のロシアがそのころの蓋平城内から大分離れた地に線路を敷いたので、私たちが住んでいたころでも駅付近には何もなく、牧歌的な風情であって、その中に点々として学校や郵便局などの日本人のための公共の建物が建てられていて、日本人の拠点のようになっていた。駅から少し離れた地域が日本人経営のリンゴ園で、確か十数軒あったと記憶している。

駅前から旧城内に至る道には、両側にアカシヤ

の大木が並木を作っていて、春となり一斉に花が咲くとその薫りが強くて酔ってしまうようだった。しかも夏になると大きな葉が茂って、真夏の照りつける太陽の光を遮って、涼しい木陰をもたらしていた。その並木通りを学校に通っていたが、当時は自動車はもちろんのこと、自転車も少なく、通り過ぎるのは鈴の音をシャン、シャンと鳴らして走る馬車ぐらいで、今から考えると平和で、のどかな風景であった。

学芸会とか、運動会とかの学校の年中行事があると、日本人の家族は大人も子供も総出で、地域住民の行事のようになっていた。

冬になると、高学年生総出で運動場の周囲二百メートルぐらいに土手を築き、その中に水を張って、スケートリンクを造っていた。冬の体育といえどスケート滑りだけだった。

学校から南に約一キロメートルばかり離れたところを流れていた蓋平河は、満州では珍しい水の澄んだきれいな河であった。時期になると鮎も釣

れると聞いていた。夏になると私たちも釣りに行ったものだった。釣れるのは、ハゼやハヤなどの淡水魚であった。釣に飽きると水遊びをしたり泳いだりして、短い夏を楽しく思う存分に遊んでいた。しかし、冬になると河一面が三十センチメートル以上の厚さに凍りついてしまい、住民はそれを大鋸で一メートル四方ぐらいの正方形に切って、それぞれの家の地下室に入れていた。

蓋平河の上流は、南から東に向かって回るように流れていたもので、私たちはその上流まで行って、全面凍った河面をスケートで河下りをした。

河の表面は、運動場に造ったリンクと違って、平らでなく凹凸があって、それを避けたり飛び越えたりして滑るので結構大変で、学校の近くまで滑ってくるのに何時間もかかり、へとへとになっってしまった。一回滑ってくると当分は滑りたくなかった。

駅前を通って、西に向かって四、五キロメートル行くと渤海湾にたどり着くが、その渤海湾に蓋

平河が流れ込み、河口近くは扇状地になっていて、満州でも有数の塩田が広がっていた。塩田には水路が縦横に巡らされていた。

いつだったか、父の同窓会行事でその塩田の水路を一部仕切って干上がらせ、ボラやナマズなどを手掴みで取ったことがあった。河口には舟だまりがあって、現地人の漁夫が屯していた。漁獲量がどれくらいあったかは知らないが、蓋平市内にも天びん棒を担いで売りに来ていた。「ホアン、ホァユイ」と大きな声を調子良く出して歩いていたが、売り声は今でも耳の底に残っている。グチの小さいのやシャコが主であった。

渤海湾の河口からさらに南の方に向かって行くと営口市があったが、その南側にも海水浴場があった。そこは遼河の河口で河から吐き出す泥土で、海水は少々泥色に染まっていたが、遠浅でもあって砂はきれいで良好な海水浴場で、砂場を少し掘ると赤貝等が取れた。現在は、営口市や隣の熊岳城を含めて、観光リゾート地になっているそ

うだ。

蓋平河河口の塩田付近から蓋平駅に至る一体は、アルカリ質の土壌で塩分を多く含んでいて、赤色に変色した草がまばらに生えているだけの荒地であったが、そのうちに内地から伊予開拓団の主力が入植し、土地改良をして水田を造っていた。終戦時には立派な水田になっていた。

平成六年の訪中時に藩陽までの鉄道路線沿いに広がる大水田地帯を見たが、これなども伊予開拓団の成果を範にしたものではないかと思った。

蓋平市街もだんだんと発展し、それにつれて人口も増えてきて、必然、学校の生徒数も多くなってきた。私が小学校を卒業するころには教室も手狭になり、父が教室を一つ寄付したと言っていた。

我が家の農場も、リンゴ栽培が主目的であったが、リンゴの木が大きくなるまでの間はトマトの半促成栽培やメロンの温室栽培と、当時では最先端をいく農業政策をとっていたが、それが効を奏

して結果的にはリンゴの育成も順調に進展し、献上品となるような良品ができてきた。

兄は、父の跡継ぎになるべく東京農大に進学し、姉は旅順高女を卒業して大連の家政学園に行ってしまったが、家には妹と二人だけになってしまったが、その私も小学校を卒業することになり、「さて！どこに行くか？」という段になった。当時、旅順の中学校は寄宿舎も完備していたし、姉も学生生活を送った所であり、保証人となつてもらえる人もいたので、旅順中学校を受験することになった。

四 旅順での生活

旅中を受験するために、友人のH君、旅順高女を受験する女生徒三、四人と共に、先生に引率されて旅順に行ったが、これが私の蓋平から外に出た初めであった。

学科試験のことはほとんど忘れてしまったが、身体検査で聴力検査があつて、旅中上級生の指示で目をつぶらせられ、あとから腕時計の音を聞か

せて、「右か？ 左か？」と答えさせられたが、聴力が鋭敏だったらしく、その上級生から「目を開けているのではないか」と疑われ、時計を離したり近づけたりして、他の受験生の倍以上も時間をかけられたことを覚えていた。後年、この鋭敏だった耳が、聴力を失うという思い掛けないことになるうとは、夢想だにしないことだった。

幸いに入学試験に合格して、旅中の生徒となり寄宿生活をする事となった。旅中の寄宿舎は、南寮、北寮に分かれていて、その間に大食堂があった。大食堂の二階は、体の弱い生徒が起居する寮となっていた。北寮と大食堂は赤レンガ造りの新しい建物だったが、南寮だけは白亜の三階建てで、テラスが付いている帝政ロシア時代の古風な建物で、以前は百貨店だったと聞かされた。

平成六年に訪れたときに、そこにも行くことを楽しみにしていたが、都合で行けず残念だった。話に聞くとアパートになっているとのことだった。

入寮した当時は、床は全部板張りで、八畳間ぐらいに仕切られた居室には畳が敷き詰められていて、和室のようになっていた。しかし驚いたことは、南京虫がいることだった。蓋平の家ではもちろんのこと、市街でも見たことはなく、初めて南京虫にご対面ということだった。夜、寝ているとむずむずとかゆみを感じたので、目が覚めて飛び起き、電気をつけると布団の中から体長一センチメートルぐらいの茶色の虫がぞろぞろと出て来た。布団だけでなく、壁や畳のへりなどからも出て来ては、素早い動きで暗い方に逃げていた。同室の四、五人も、みんな飛び起きて大騒ぎをしたものだった。

当時の旅中は、時代の流れに沿って陸軍予科士官学校や、海軍兵学校などに入るための予備校のような存在で、授業はもちろんのこと、寮での日常生活も軍学校の模倣のようだった。上級生には絶対服従、道で擦れ違っても敬礼をしたし、言葉を交わすときもすべて敬語で、語尾を「……で

す」と言うのと怒鳴られた。「……であります」が標準であった。

寮だったので、寮監の先生はもちろんいたが、日常の規律維持は上級生に任せていたようだった。上級生には規律維持のために、「鉄拳制裁」という特権が与えられていて、何かにつけて殴っていた。これも軍隊内での悪習の模倣だったのだろう。

私は、南寮の三階に部屋を与えられたが、終戦までに南寮内では三回も部屋が変わったが、とうとう北寮での生活は経験しなかった。一緒に蓋平から旅中に進んだH君は、体を悪くして転校した。一年以上級にはやはり蓋平小学校同窓のUさんがいたが、勉強嫌いが災いして、留年して私と同級生になった。Uさんは、F先生の家に下宿して特訓を受けていたが、語学の才能だけは優れていたとのことで、敗戦後、中共軍に入って通訳をしていて、軍服姿で我々の前に現れたときには驚いたものだった。F先生は二年生のときの担任だった。

だが、昭和二十年の春、関東軍根こそぎ動員で北満に行かれ、ついに帰って来られなかった。日が経つにつれて授業も軍事教練が多くなり、部活動でもモールス信号の通信訓練が始まった。私も訓練を受けたが、生来の不器用から電鍵を打つ速度がみんなに追い付けず、ついに退部させられた。

その他、敵性語廃止のために正規の授業から除かれた英語も、「敵を知るためには必要」という理由をつけて部活動として存続していたが、それも才能のない私は覚えが悪かった。

当時の寄宿舎生活で一番の問題は、食べることであった。腹が減って往生した。普通は、大豆入りご飯に一汁一菜がただけだった。

休日になると保証人のKさんの家に行った。Kさんは公主嶺で農業の先生をした経験があり、旅順では養蜂業を営んでいた。Kさんの家には子供が六人もいて大家族で、子供たちに満足に食べさせることだけでも大変であったと思うが、私たち腹ぺこの生徒が押し掛けても、笑顔を絶やすこと

なく迎え入れてくれた。

二年上級の先輩がいたので、話を聞くことを楽しみにしていたが、本当はご馳走してもらえらることを当てにしていたのだった。

日本に引き揚げてから、私たち一家は東北地方で入植したが、父がKさんを近くの開拓地へ入植を世話したのも、当時私がいいろいろと世話になった、せめてものお礼の気持ちがあったのではないかと思っっている。

しかし、いくら笑顔で迎え入れてくれるとはいえ、そうそうKさんに世話になることもできずに、三回に一回は我慢して寮でごろごろしていたが、そんなときは同室の者と謀って寮を抜け出し、闇売りのリンゴ、サツマイモ、ピーンズなどを買いに走った。ピーンズとは、トウモロコシを粗碾きして練り、一握りぐらいの大きさの円錐形状にし、底に親指ぐらいの大きさの穴をあけて大鍋の周りにくっつけて蒸し焼きにしたもので、ぼそぼそとしていたが、中国人の一部ではこれを常

食にしていた。あまりおいしいものではないが、腹にはたまった。薬屋に行って「わかもと」を買い、これも腹の足しにしていた。

旅中二年生の十一月に、「母、死す」という電報が寮に届いた。寮監に事情を話して帰宅を願ったが、寮監は、「本当か？」と疑いの言葉を発した。そのときは今で言う「きれる」寸前となり、腹が立ってなかなか治まらなかった。

海岸沿いに道を駅に向かって走ったときに、並んでいる電車が共に泣いてくれたような気がしたが、のちにその話をする時、それが「もがり笛」というものだを知った。

昭和十九年ごろになると、戦局の雲行きが陰しくなり、まさに非常事態となってきた。同級生の中からも、少年飛行兵や幼年学校に行く者がでてきて、「醜ししの御楯みたて」となって戦の場で死ぬのは当然という風潮が、周囲にもみながってきた。

休暇で帰省したときに、「少年飛行兵を受けたい」と、父に話したら、「もう少し勉強を続けな

さい。お国に御奉公する道はいろいろとある」と言って反対された。

三年生になると学徒動員で、授業はほんの付け足しみたいになった。動員先は大連甘井子にある、「満州化学」と「進和鉄工」であったが、私は進和鉄工に配属された。配置された所は、ボルトを造る部署で先輩工員はクーニャンたちで、きれいな顔をしているのに着ている服はぼろぼろで、わざと着ているのだと聞いたことがあった。

時間単位での仕事はどうかできて一人前になったが、仕事の合間には軍事教練があった。教官はシベリア出兵に参加したという在郷軍人で、「ともかく、敵を一人殺せば、天皇陛下に対して一人忠である」と言って励まされた。軍事教練といってもほとんど銃剣術だった。ある日のこと、木銃を忘れた私は、「不忠者！」と言われて木銃の台尻で頭をたたかれて、目から火の出るような痛さであった。

動員四カ月余りの八月十五日、終戦を迎えた

が、ちょうどその日は工場が休みだったので、全員寮の前でラジオを聞いたが、何を言っているのか皆目分からず、翌日工場での訓示を聞いて初めて、「戦争に負けた」ことを知った。

即時、旅順に帰ることになった。あまり急いで汽車に乗ったので、命より大事といわれていた、菊の御紋章の入った三八式歩兵銃を持って来るのを忘れてしまい、本当の不忠者となってしまった。

寮に戻ると、一、二年生はもうそれぞれ寮から出て行ってがらんとしていた。寮監の決断処置が早く、結果的に良かったとのことだった。寮の裏手大通りの向こう側が旅順高女であったが、高女では遠方から来ている生徒を帰すことを心配したために、時機を失してしまい大連に移したため、その後に随分と苦勞をさせたとのことだった。私たちは、その日の列車でそれぞれの家に向かうことができた。

五 引揚げまでの生活

蓋平でリンゴ園を經營する以上、当然この地に骨を埋める覚悟であった父は、「五族協和」という美名のもとに今日まで進められていた、満州の国策の裏の実態も、当然に承知していて、これららのように満州国が変化していくのかを判断したのだろうが、敗戦を知ってほどなくリンゴ園を解散、そして家族の即刻引揚げを決断して、常備の中国人に対して給料を支払い、また、飼育していた牛などの家畜はもとより、使用していた農機具なども、全部分け与えてしまった。一部の人のように、夜逃げをするようにこの地から出て行く気持ちになれなかったようだった。それは、今日まで共に汗水を流して働いていた現地民とは、お互いに信頼関係を持って接していたし、虐待などは全然なかったもので、個人的に恨みを持って復しゅうされるといふことも考えられなかったからである。

数日経過すると、この蓋平にもソ連軍が大挙し

て進駐してきた。市街の目抜き通りを蓋平城に向かって勇ましく行進して行ったが、蓋平城内ではこんな大部隊を受け入れることはできずに主力部隊はそのまま前進して行き、蓋平にとどまったのは少数勢力の部隊だったが、隊長は司令官と呼ばれていた。

不良中国人の手引きで、二、三人ずつのグループになったソ連兵が、入れ替わり立ち替わりして日本人住居を襲っては、めぼしい物を略奪していた。両腕に腕時計をいくつも着けているソ連兵をよく見掛けたが、両腕がいっぱいになっているのにさらに時計を狙っている兵隊が多かった。

最初のころの略奪目標は、時計と酒だったが、そのうちに時計も、酒もなくなってくると、次第に行方も荒々しくなってきた、家の中に入っては、天井に向けて実弾を撃つようになり、凶暴性を増した行動となってきた。案内役の不良中国人も、一緒になって略奪をしていた。

しばらくすると、我が家の前隣にある副県長の

公舎が、ソ連軍指令官の宿舎になったので、我が家の周囲は比較的になつたが、ある日、女の騒ぎ声があるので、二階の窓の隙間からのぞいたら、裏庭にある梨の木の周りに女ソ連兵が数人集まっています、スカートを広げて梨をもぎ取っていたが、このとき初めて女兵士を見た。また、家の裏手にレンガ造りの半地下式の頑丈なリンゴ貯蔵庫があり、その一角を家庭用の食品倉庫にしていた。それが見付かり鍵を壊して入られて、庫内にあつた数十本の洋酒と蜂蜜の貯蔵かめを略奪されたが、後にそこに行つてみたら倉庫内でも飲んでいたらしく、洋酒の空き瓶が数本転がっていた。

驚いたのは、リンゴ園で使用するために隅の方に保管してあつた、ダイナマイトが二、三本かじられた状態で捨てられてあつた。ダイナマイトは、英語の注記の入つた三十センチメートル四方の木箱に入っていたが、彼らにこの英語が読めるはずはなかつたのだろう。ダイナマイトは、一本

が直径二センチメートル、長さ七センチメートルの六角の棒状で色はこげ茶色であつたので、羊かんなどと思つてかじつたのである。ダイナマイトと知らればどんな問題を起すかもしれないので、すぐに処分した。

日が経つにつれて、だんだんと現地民も暴民化して暴れだしてきた。蓋平駅から離れた所に住んでいる四世帯の人たちと同居させられることになつたが、その中の一人にOさんという人がいた。中国語通訳一級の資格を持っていたので、大變に心強いことだつた。その後、父が他の日本人有力者と共にソ連軍によつて拘引されたときも、中国人の警察官に、女、子供だけの心細い集團の警備について頼み込んでくれるなど、大變に世話になつた。

そのうちに市内在住の日本人に対して、小学校に集合するよう命令が出たので、わずかな身の回り品を持って集合した。そこでグループ分けされて、貨物列車に乗り北上したが、途中、あちらこ

ちらで列車は停められて、十日ぐらい経って再び蓋平に引き返した。その途中で、旅中の寮で同室だったM君一家とも、同じように引き回されている別の列車に乗っていたのに出合った。

蓋平に戻ってしばらくは、小学校で集団生活をしていたが、数家族ずつ分散して生活を始めた。

我が家は駅に近い、以前住宅だった家を割り当てられたが、一棟の半分が一軒分で、八畳間二間に六人家族のNさん、もう一間に四人家族の私たちが入った。もう一間の三畳には、宮城県出身の女性が入った。

N家とは引き揚げるまでの約一年間、一緒に生活し苦楽を共にした。Nさんの下の子供が、ここにいるときにジフテリアにかかったが、薬もなく手当をすることができないままに亡くなってしまった。

多少の蓄えがあっても、先行きが分からないので大事にしなければならぬというので、みんな働きの出ることにした。ソ連軍が進駐している

ときは、蓋平駅から貨物列車で、日本から奪ったいろいろな物資を戦利品として本国に送っていたので、積み込み作業に出た。ときには野菜なども積み込んだが、それを失敬して持ち帰った。

ニンジンは案外に甘くておいしかった。近くに変電所もあったので、変圧器の油をとってくるという人たちと共に行ったが、日中だったので監視の兵隊に見付かり小銃で撃たれて、ほうほうの体で逃げたが、「しゆる、しゆる」という弾の飛ぶ音を聞き、いささか恐ろしい体験だった。

進駐当初のソ連兵は、乱暴狼藉の限りを尽くしていたが、日が経つにつれてだんだんと落ち着いてきたのか、乱暴はしなくなったが、女を求めめることは相変わらずだった。若い女性は頭を丸刈りにして男物を着て、顔にすすを付けて男装をしていたが、それでも家から出ることは駄目と言われていた。居留民会のS会長は、その対策に随分と頭を悩ませたが、ついに奉天（瀋陽）まで行って花街の人に話をつけて、二人の人に蓋平に来ても

らい、防波堤になってもらった。引揚げ後は、私などは恩知らずにも忘れてしまったが、S会長は亡くなるまで彼女たちの面倒を見ておられた。

私は働くことは嫌いではなかったし、何にでも興味を持つ方なので、近所の人が仕事に出るときは、小柄で一人前の力もないのに頼み込んでグループに入れてもらった。あるときは、ロボの代わりに石臼を回しへとへとになったこともあったし、「ツアオートウ」という草取り鋏で炎天下での草刈りもしたが、一日で断った。この仕事は本職の人もいて、賃金も良い代わりに、体力と要領が必要な仕事である。

馬車で運ばれたセメント袋を倉庫内に積み上げる仕事もきつかった。ここでの食事は、主人と同じで高粱飯とピーマンに味噌を付けたお菜だったが、その主人は、生ニンニクや長ネギなども常食していたから力が出るのだと言っていた。

その他、中共軍の使役の割当てもかなりあった。国民党軍が列車で襲撃して来るのを防ぐた

め、線路のレールを外し、七、八メートル下の土手に転がし、枕木を掘り起こし、電柱や電線を利用して鉄条網を構築するなどの作業で泊まり込みであった。夜、疲れ果てて寝ると虱の大群に襲われて散々だった。この仕事を監視していた未だ二十歳前後の中共軍の下士官は、「自分の両親は、日本軍によって殺された。だが悪いのは軍人であってお前たちではない！」と言ったときは、みんなしゅんとなったことを覚えている。

別の仕事では、蓋平駅に向かう大石橋から旧街道に入った関門、青石関という所の山頂にトーチカを構築する作業に何日間か泊まりがけで行ったこともある。近くでは国、中両軍による戦闘が行われているらしく、「早くやれ、早くやれ」とせき立てられる仕事だった。負傷者を担架で運ぶ仕事をさせられた者もいた。仕事がないときには、中国人から依頼されて、農園で剪定作業などを指導したこともあった。

蓋平市内の治安には、ソ連軍が進駐していると

きは中国人の警官が当たっていたが、ある日忽然として姿を消してしまった。居留民が動揺していると、そこに中共軍が入って来た。中共軍は軍律が厳しく、日本人の間でも信頼されていた。中共軍の支配下にあったのは、昭和二十一年の春だったと思う。ある日、「大人は全員、小学校の南の土手裏に生まれ！」という指示があった。私は行かなかったが、父と姉が行った。私と妹の二人は、不安な気持ちで父たちの帰りを待っていたが、そのうちにむっとした浮かない顔をして戻って来たが、言葉もなかった。しばらく黙っていたが、「人民裁判があつて、SさんとMさんが銃殺された」とだけ言つて、また無言になった。

父は一時、居留民会の会長に推されたが固辞し、Sさんが就任した。Sさんは鹿児島県出身で、子供の一人は私と同級だった。県の労働部長をしていたので、憎まれていたからだというもっぱらのうわさだったが、罪状は、「武器隠匿」ということだった。

中共軍支配下に「日僑管理班」という組織があつて、中共軍の命令を日本人居留民に伝達、指導、教育、宣伝等を行つていた。夜間には学習会という名目で共産主義の教育もしていた。

ある日、「子供以外の全員、神社下の日本人墓地に集合せよ」という指示が来た。その数日前には、小学校の講堂で不当な密告により銃殺された人があつたが、この日の集合は密告したHとYをどうするかという人民裁判だった。日僑管理班の者が一方的にしゃべりまくつていて、集まった人々はみんな黙っているままだつた。

そのとき、一人だけ弁護に立ち上がった人がいた。その人は、以前我が家の農場に押し掛け人のごとくに来て仕事をしていた人だった。腕は大変良いとのことだったが、同じ雇用人の中国人との折り合いも悪く、大酒飲みでもあつたのであまり好感を持っていなかった人だったが、一人で同胞の弁護をする勇氣には感心した。

結論はすでに決まつていて、反対などは許さな

い雰囲気で、すぐに二人は銃殺された。わずかにセンチメートルぐらいの鉄の塊が、人の命を瞬間に奪ってしまう恐ろしさを目の当たりにして、今でも心にその恐怖が残っている。この二件の人民裁判は、ほとんど冤罪であり、何一つとして証拠があるわけでもない。時代が起こした悲劇として片付けてよいものか、私は今もって理解に苦しんでいる。

昭和二十一年の夏ごろの蓋平は、市街地は中共軍の支配地になっていて、北側の大石橋地区は国民党軍の勢力下になっていた。いわば兩軍の接線線だったが、戦闘は行われることなく平穩であった。ただ、ときには駐留の中共軍が一夜にして消えるように市街から撤退し、数日すると再び戻って来るというようなこともあった。

引揚げが開始されるといふ情報が入ったのは、秋になってからだだったが、その話はずぐに中国人にも伝わったらしく、今まで中共軍の支配下で身を隠していたリンゴ商人が、危険を省みずに我が

家に来て、今までの売掛金か餞別かは知らないが、持って来たことには感じ入った。やはり中国人は信義を重んじる民族であることをつくづく知った。

悲惨極まりなく、いろいろな出来事があった満州の中で、比較的に恵まれていた蓋平ではあったが、敗戦後一年余りの間には無念にも亡くなる人も多く、あちこちに土饅頭が残されていた。

いよいよ引揚げが本決まりになった。蓋平からの引揚者は約一千四百人余りで、私たちは蓋平第一大隊と言われていたので、引揚げ第一陣ではなかったかと思う。医者や各種の技術者の人々は留用になって、家族共々帰国を先延ばしにされた方も少なくなかった。

昭和二十一年九月十三日の早朝、駅前広場に集合、そこから大通りにかけて手配されて集まった多数の荷馬車に、それぞれの家族が割り当てられ、二、三家族が一台の荷馬車に荷物を積み、人はその上に乗って出発した。狩り出されて作業を

したトーチカのある青石関を通り大石橋に向かったが、途中で雨に降られて道路がぬかり始め、重たい荷物を積んだ荷馬車は、わだちをとられて難渋をした。親友のU君の父親は、病気だったので担架で運んでいたが、途中で振り落とされて大変だった。そのため引揚船に乗る前に亡くなられてしまった。どんなに残念だったことか。

夜は、大石橋の手前での空き家とか車宿のようなどころで一泊し、翌朝、とぼとぼと歩いて国民党支配下の大石橋に到着した。今度は、列車に乗って奉天に行き、奉天では市内で分散収容されて、数日順番待ちをして錦州に向かったが、無蓋貨車にすし詰め状態となり、列車も途中で休み休みの運行だった。随分と時間がかかって錦州に到着した。錦州では床のない古い倉庫のような所に入れられたが、満州のあちこちから集まって来た何千人という引揚者が、順番待ちで待機していた。ここでも数日過ごして葫蘆島に移った。葫蘆島の興城は、父が理想のリンゴ園を造ろうとし

て、二百町歩の土地を持っていた所だった。

炎天下での荷物検査があり、どうにかそれも終わってやっとの思いで乗船した。引揚船は米国のリバティ型の輸送船で、狭苦しい船底に押し込まれた。数日間の船内生活のあと、無事に博多湾外に停泊した。コレラ検査、虱退治のDDTの散布で真っ白になって、待ち望んだ博多港に上陸した。手渡された「引揚証明書」の日付は、昭和二十一年十月二十二日になっていた。数えると、蓋平を出てから実に三十九日間もかかった長途の旅だった。

引揚列車は超満員で、やっとの思いで仙台に着いたときは疲労困憊の極みであった。仙台駅に降り立ってホームから眺めると、はるかかなたまで一望千里の、黄金色の広々とした荒地だった。

まず最初に訪ねる父のいとこのN家は、その荒地の境近くにあったが、幸いに災害を免れていた。温かく迎えてもらい、エンドウ入りの炊きたたのご飯をごちそうしてくれた。ひと休みしてか

ら亡くなった祖父の家に行ったが、そこはすでに父の義弟一家に加えて他の親類の家族もいて、私たちが入る余地はなかった。

翌日、父の生家の涌谷に行った。そこが本家である。座敷に迎え入れられたが、父のいとこでもある奥さんが、きちつと座り両手をつけて「ようこそお帰りでござりやした」と、挨拶されたのには驚いた。礼儀などすっかり放棄していた数年だったから奇異に感じたのだった。

六 現在までの生活

至れり尽くせりの面倒を見てくれた本家の人だったが、当主の教員としての給料をやりくりしている台所事情を知ると、長く世話になることもできず、県内外での農業適地を探していた父は、当地大沢の開拓事務所長のM氏と、父の理想とする「青森に負けないリンゴ団地の造成」という夢に意気投合し、大沢地区に入植することとなった。すでに、S種苗会社に就職の決まっていた兄も、父と一緒に開拓することになった。雑木林は

立派だったが、掘り起こすと意外にやせ地で食糧にする草もないくらいだった。肥料も少ないので馬ふん拾いもしたが、恥ずかしかったので夜明け前に拾いに行ったものだった。

この開拓地は、三年間で開墾が終わったら払い下げになるという条件があるので、家族は一生懸命に開墾を振るって頑張った。私も生来虚弱体質だったが、そんなことは忘れて雪にも負けずに、上半身裸になって働いた。手の平は豆だらけで、豆の下に豆ができていて、さらにその下に血配給を受けていた。

しかし、そのような無理がたたって、昭和二十五年に肋膜炎になったが、それでも働き続けた。そのうちに若いときに結核にかかったことのある父が、再発して入院し、私も続いて結核を発病して、父と同じ病院で枕を並べて入院するはめになった。

退院したのは昭和三十一年だったが、入院中の

ストレプトマイシンの副作用で耳が聞こえなくなっていた。そのころには兄は結婚して子供もいたので、家の隣に小屋を建てて父と寝起きを共にした。栄養補給のため、青大将や山かがしやガマ蛙などにも大分世話になった。

父の生涯の夢であったリンゴ園も、木は年と共に大きくなっていったが、馬の背のような丘陵地だったので、リンゴが実るころに台風が来ると、落果して収穫ゼロになり、経営も成り立たなくなるので、見切りをつけて酪農に転換した。父は、晩年まで畑に出て菜園の世話をしていたが、九十歳で生涯を終えた。戦後の復興で、一番苦勞した兄も姉も早々とこの世を去ったが、私は自分の体の弱さを自覚していたので自重自愛し、そろそろと今日まで生きてきた。

七 終わりに当たって

現在このような平和な世の中になり、平穩に生活できることは、かつての悲惨だった時代に、私たちが温かく支え助けてくださった方々のおかげ

と、その恩を一日も忘れることなく感謝の気持ちで過ごしている。

生まれ故郷である中国は大人国で、よくも寛大に日本人を帰してくれたと、感謝するばかりである。旅行で親しくなった通訳のRさん、かつての中学校の寮で二年間一緒に生活したYさん、その他の中国人の同級生、同窓生が、先生にまで「チャンコロ！」と侮蔑の言葉を浴びせかけられていた悔しさはどんなだったろうと、今しみじみ思うのである。

私は日本人として、心から深く深くお詫びをする気持ちでいっぱいである。今後共、余生の許す限り世界平和のために向かって、何らかの行動をして生きていきたいと思うばかりである。